

# 庄内協同ファームだより

No.118 2007年7月号



発行/  
〒999-7631 山形県鶴岡市八色木字西野338  
tel.0235-78-2120 fax.0235-78-2140  
<http://www.shonaifarm.com>



小麦部会の生産者たち

麦秋の頃となり麦茶の原料の大麦も黄色くなり収穫を迎えています。秋の長雨や積雪の無い冬、春先の不順な天候を克服して、ようやく収穫の時期を迎えました。ところが我が家の麦畑は所々に雑草が繁茂し収穫に耐えがたい状況です。冬の間はずこぶる順調でしたが、春先の不順な天気の影響で圃場が湿害に見舞われ生育不順となり、雑草に負けたのかも知れません。麦

茶には到底なれず、百姓の浅知恵「来年こそ」と収穫を断念することにしました。

その一方で加工品「おこし」原料用の米を作る田んぼでは不順な天気をものともせず稲は順調に生育しています。今年も合鴨がにぎやかに「せっせ、せっせ」と草取りに精を出してくれています。他の人の圃場では「カラスの害や今流行のハクビシンの害」などが聞かれましたが、そんな害も無く我が家の合鴨は順調に大きくなっています。田んぼがすぐ家の裏なので家中から両親が「今日は朝からよくかせくでのー」とか「今日は休みばりおげけ」とか、恒例ながら孫を見つめるように眺めています。それでも田んぼの雑草は合鴨の間を見つけては我先と日々生長し機械除草でも追いつけない所も多く在り、梅雨空の下、妻と二人で合鴨に変わり雑草取りに精を出さなければと話しています。

そんな日々の中、今年も認証団体の監査の時期になりました。日頃の記帳のミスを注意しながら、去年の注意点の見直しや、今年は注意を受けないようにと「チェック」「チェック」を繰り返しています。記帳の習性のとほしい私にとって頭の痛い時期ではありますが、これがより良い商品作りに反映することを信じてつづめています。

農家はお天道様しだいと言われています。異常気象が叫ばれて久しいのですが、暖冬の影響で水不足にならないければ、夏の天気が順調でありますようにと、やがて来る梅雨空を思いつつ過す今日この頃です。

皆川裕一

# 組合員 訪問

その10

志藤 正一 さん  
知子 さん

稲作と養豚 枝豆の複合経営で循環型  
自然農業を実践している、庄内協同ファ

## あえて難しいことに挑戦 循環型自然農業に取り組む

ーム代表の志藤正一さんと、妻の知子さん  
互いに「違うタイプ」と評するが、好奇心  
と挑戦、こだわりが農業に向かう二人の  
共通点だ。

ファーム仲間でも養豚農家は唯一  
父の時代から取り組み、四十五六年  
になる。自分の代になって二十年以上は  
経った。高校生時代から就農直後の二十  
歳代のころは、米に絞って経営規模を拡  
大するか、米と畜産など複合経営にする  
かの分かれ目で、ずいぶん仲間と議論し  
た。そのうち、複合経営で家畜の糞尿を

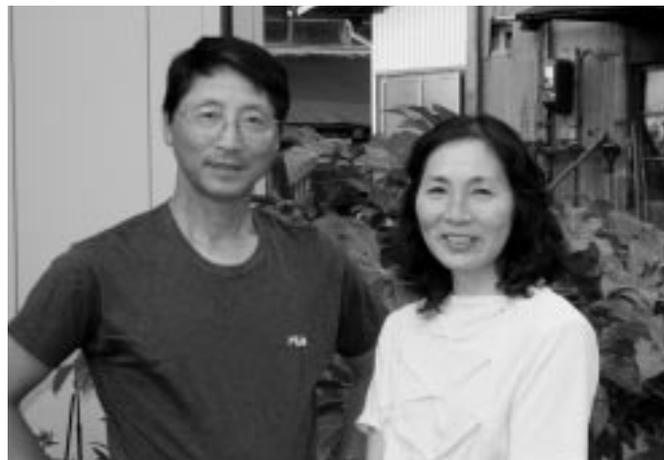
有機肥料にして作物を栽培するという  
循環させる農業がよいと思い始めた。

豚を育てていると、エサやりや豚舎の掃  
除など毎日しなければならぬ仕事があ  
り、一年中休みらしい休みはとれないが、  
デリケートで記憶力もよい豚を相手にす  
るのは面白い。栄養管理と健康管理が大  
事だから、一頭ずつ顔を見てエサの量を加  
減したり、子豚がかたま  
て寝ているか二頭ずつ寝てい  
るかを見て風の入り具合  
を調整したり。毎日同じ

えていく。

小さい子どものころから、農業をやる  
と想ってきたが、やってみて面白いと感じ  
るのは、難しいことに挑戦するとき。米で  
も栽培しやすいはえぬき「よりん」シビ  
カリ「や」ササニシキをきちんと栽培し  
て品質のよいものを作りたい。

自然農業の利点は



農業経営に家

畜を組み込んで、  
糞尿を微生物で  
発酵させて堆肥  
を作り、それを  
田畑に使うのが  
基本。有機栽培  
に取り組もうと  
すると、土づく  
りが大切で、自  
家製の家畜の堆  
肥と、米ぬかで  
作った堆肥の「ほ  
かし」の二種類  
を入れるとよい

土ができる。自家製で作るのは手間がか  
かるが、これを全部購入するのは経営的  
に大変だと思つた。

アジア学院の農業研修生を受け入  
れたり、インドで農業指導をしたりと  
忙しい

インドでは有機農業の技術と、ミニ農  
協の作り方、農産加工で付加価値を付け



て販売するこ  
とを教えてい  
る。庄内協同  
ファームで取  
り組んでいる  
ことを教えて  
いるようなも  
の。資本に振  
り回されずに、

農民がいかに農業を続けていくかがテー  
マだ。

アジア学院の研修生は十数年前から  
毎年受け入れている。農業技術を教える  
ことで、国際交流とか人とのつながりだ  
とかができて、自分が何者か見えてくる  
気がしている。子どもたちにとっても大き  
な刺激になったようだ。

知子さんの支えも大きい  
ファームの代表になってから、組織での  
仕事が増えた。家の仕事を理解して立ち  
回ってくれるので助かっている。結婚して  
から農業を覚えたのだが、子育てしなが  
らの初めての農業は大変だったと思う。  
今は妻の方が余裕がありそうだ。

プロフィール

志藤正一(五九)、知子(五四)

鶴岡市鷺畑

家族 夫婦、長男、母の四人暮らし

経営規模 水田五畝(でわのもち三・三畝、  
コシヒカリ二・二畝、ひとめぼれ〇・五畝)、枝豆

〇・八五畝、柿〇・八畝、養豚三百五十頭

# こな・モロヘイヤ



6月中旬頃のモロヘイヤ

ビタミン、ミネラル豊富なエジプト原産のモロヘイヤは今でこそ、どこのスーパーでも手に入るポピュラーな野菜ですが、日本に紹介されたのが二十数年前、本格的に栽培が始まったのは十数年前からです。高温多湿を好む野菜で全国どこでも栽培ができ、しかも害虫や病気に強い野菜です。それを、天日乾燥し粉末にしたのが『こな・モロヘイヤ』で、当法人設立当初頃からの息の長い商品です。

化学肥料、化学合成農薬を使用しないで栽培、生葉の乾燥も暑い最中の天日乾燥、製粉は注文に応じてそのつど行ないます。少人数のご家庭を考え一袋40g入



り、食べ方の一例を挙げれば、次の通りです。

味噌汁や各種スープまたはお茶、ミルク、ヨーグルトなどに入れていただきます。

ご飯、うどん、そば、カレー、シチュー、ラーメン、焼きそば、ハンバーグ、オムレツ、目玉焼き、大根おろし、納豆などにふりかけたり、混ぜ合わせたりしていただきます。

てんぷらの衣やお好み焼き、クッキー、ピザ、クレープ、カステラ、ケーキの生地に混ぜたりして使います。

野菜嫌いの方特にお子さんに無理なく、しかもおいしく頂けるビタミン、ミネラルが凝縮されているヘルシー商品です。

## Let's クッキング

### トマトと豆腐のじゃこサラダ

冬のみかん・夏のトマトは手軽なビタミンC源の代名詞です。疲労回復はもとより体力をつけるのにも役立ちます。

#### 作り方

ちりめんじゃこは油でカリカリに炒める。  
トマト、じゃこ、豆腐を盛り青じそ、長ねぎをちらす。  
A の調味料とレモン汁をかける。

(菜々のキッチンより)



#### 材料 4人分

- ・トマト...小3コ(乱切り)
- ・ちりめんじゃこ.....40g
- ・木綿豆腐.....300g  
(大きめのさいの目切り)
- ・青じそ.....3枚  
(みじん切り)
- ・長ねぎ.....5cm  
(みじん切り)
- ・サラダ油.....大さじ1
- ・レモン汁.....1個分
- A  
塩.....小さじ2/3
- しょうゆ.....小さじ2
- こしょう
- にんにく.....1かけ  
(すりおろす)

## 農村のひとこま 「消防団の操法練習」

地域の消防団が、ポンプ車などの操作と消火技術を競う「操法大会」に向けた練習を始めた。毎年この時期には多くの集落で、出勤前の早朝や帰宅後に消防団員が熱心に訓練に打ち込む姿が見られる。初夏の明るい日差しと、団員のきびきびした動きに



すがすがしい気持ちになった。

操法大会は、地区予選を勝ちあがると県大会、全国大会へ続く消防団にとっての一大イベント。技術や操作時間、チームワークや態度など、さまざまな採点基準の合計得点を競う。どの団も時間がない中で練習するため、ビデオ撮影して家で動きをチェックするなど、工夫を欠かさない。初めはいいや練習していた団員も、いつのまにか真剣になって「一致団結」。農村の若者のコミュニティづくりにも一役買っているようだ。

消防団は通常はそれぞれの仕事に就きながら、火災予防や防災活動を行い、火災の際には消火活動、災害発生時の救出・搜索活動などを担う地域の自助団体。全国的には団員数が激減しているが、庄内地域ではまだしっかりと続いている。

# へんりれー徒然草

佐藤喜美



関東、関西は梅雨に入り、じめじめとした日々を送っている頃でしょうか。

私たちの住む鶴岡は、ここ数日曇り

つない晴天に恵まれ、特産品であるだちや豆も申し分なく育ってきてくれています。私としては、だちや豆だけが大きくなってくれると何より嬉しいのですが、自然はそんなに優しくなく、日々雑草との闘いです。私たちだけでは、雑草を取りきることは無理なので、大学生に手伝ってもらっています。ある子は無心になり、もくもくと仕事をし、ある子は手より口が動いて



順調に生育している枝豆畑

いる子がいて、その違いについていじ笑んでしまう日々です。私はと言えば、日々の夫との闘いへの作戦を立てているといったところでしょうか。このよ

うな毎日がとても楽しくいつも農作業をしています。

また、今年来ている大学生の一人は春の畑を起こすところから来ていて、彼の口癖は「今年こそ、きれいに日焼けをする。」と言うことです。実際、彼は肌白く、それが嫌とも感じていたようで、赤くならないように陽射しのあまり強くない時期から袖なしのTシャツを着て、徐々に肌黒くなって来ました。そして、今は順調に黒くなっているようです。しかも、彼は日焼けすることにだけは貪欲で、夏の収穫が終わるまで日焼けし続けるつもりだそうです。あまり日焼けしすぎると外国の方と間違えそつで、夏までには外国語を覚えなくてはならないかと心配です。

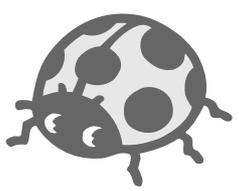
お日様のお陰で、だちや豆は順調に成長し、ひとまず、胸をなでおろしているところでありませう。

これからも我が子のように、いや、それ以上にかわいらしい作物をしつかりと栽培し、見守っていくと同時に、やはり、私としては、バイトの子がどこまで黒くなるのか楽しみであります。

## 農業ニ知識

### 生物農薬

病害虫や雑草の防除に利用される天敵昆虫や微生物をいいます。これらは自然界に存在する生物で、日本ではすでに50種類以上が農薬登録(農薬取締法では防除を目的に使用される場合はこれらの生物は農薬とみなされます)され、使われています。良く知られているのは、野菜についてアブラムシを捕食するテントウムシです。



防除効果は穏やかで即効性に欠けますが、環境への負荷が少なく、人畜などへの安全性が高く、抵抗性も生じにくいのが特徴で、環境保全型農業を推進するうえで、期待は大きく、生物的防除法の技術の確立が望まれます。

## あとがき



春の農作業もようやく一段落がついたと思うと、もう六月も半分をとうに越している。枝豆の定植も直播も終わりホツとする間もなく、気がつけば早生種はもう小さな花を咲かせ、仕上げの中耕を待っている。

有機の田んぼには、そろそろ草が目立つてくる頃。田植以来久し振りに田んぼに入り、カモの鳴き声や気配を感じながら、ヒエを拾って歩く。半日でできそうな予想は見事にはずれ、三反歩一枚の田んぼは二日ばかりできれいになった。隣の冬みず田んぼには、今年初めての除草機が入った。二回目は一週間後に必ず、と予定を立てる。

あとは、今が適期と思つた時に作業ができるかどうかだ。長雨で田畑に入れない事もあるし、所用で出かけなければならぬこともある。天気とスケジュールとうまく折り合いをつけ、仕事は適期をのがさずこなしたい。それが出来ない時、後で倍の量になって苦労する羽目になる。

そうならないことを願いつつ、今日の私に出来る仕事をていねいに追いかけていく。

(東)